雲は今波を打ちたるが如く、西北の山上に浮び出でぬ。

八幡、杉の木、稲荷など云ふ小村の一望の下に人家の點在を示せる宛然箱庭の如し。淺間は群山の間より東のかたに見ゆと云へりしが、知らずして去る。北の連山に眼を配れば、脈は三層にも四層にもなりて、一層目は深翠を凝らし、二層目は薄翠に、三層目は淺青色を爲せり。四層目に至りては灰色の如くになりて、次第に薄れゆくなり。其の盡くる處の山に今雲は浮き出でたるなり。

西の方飯繩、戸隱を中心として、脈は南方に驅けりぬ。雲はまた白く蓬々として覆ひかゝれり。其の南の際の山に寄りて、この停車場はあるなり。月なくも屈强の遊覽臺はこれなり。

われは今歸途につくべく瀘車に乘りぬ、松本より來れる室内の人は何れも目を擧げて窓外の風景に醉はざるなし。雲は幾重にかなれる雲、西の山の頂より北にかけて、もろ手を擴げぬ。變り易きは秋の空のそれと知られぬ。

稻田の幾枚ともなく層を爲して、上は段々に斜に縞目を織りて擴かるを見つゝ、瀘車はひた下りに下りぬ。

かくてわれらは長野よりまた更らに東の都に歸りぬ。（三十日）

幼稚園案内

東　基吉

右の題で、本誌第三卷の第九號から書き始めたのであつたが、都合に由りて途中で中絶させたのは、頗る讀者諸君に對つて濟まなかつたと思

ふ。夫で、こゝに更に筆を改め稿を新にして號を逐ふて續けることにする、そこで、先づ、今迄に書いた所は次の諸項であつたから、夫丈けは省いて、其次ぎから、書き始めようと思ふ。

一、女子の職業としての保姆
二、現今の幼稚園及保姆數
三、保姆養成所
四、保姆の資格
五、幼稚園の種類
六、幼稚園の本旨
七、保育の要旨
八、保育上誤謬の見解
九、保育の方便
十、保育時間のこと

大體以上の順序を逐うて書きましたが、之から

其續きに遷らうと思ふ、尤もなるべく專門的に記述する方法は避けて、極通俗に、つまり、誰にでも、家庭に在つて何人にも幼稚園の保育の理屈の知れる樣に書きたい考である。そこで先

一、遊戯

の話から始めませう。之は保育の方便の處で多少記述たし、且つ松村久子氏の幼稚園の遊戯といふ題目で、大分詳しく出て居ましたから、夫に讓ることにして、こゝには極大體に留めて置かうと思ふ。

近頃だん〳〵子供の遊戯のことが注目せられて來て、學校では勿論大に研究せられ、從つて遊戯の理論や方法に關する書物なども出版せられるし、又家庭の方に在つても、子供の遊戯といふことに餘程氣を付ける樣になつて來たのは、まことに結

構なことである。

一體遊戯といふものは、實に以て生れて子供の嗜好に適したものであつて、苟くも子供といへば遊戯を好まぬはない、若し遊戯が嫌だといふ子供があつたら、それは非凡な子だ、何れ身體の上か或は精神の上かに、通例と異なつた所があるに違ひないから、例令ば、何もして遊ばないで、たゞ愚圖々々して日を過ごす樣な子供があつたら、夫は餘程氣を付けねばならぬ。そんなら、何故子供が、この通り遊戯を好むといふに、夫は、つまる所、子供の時は其活動力が十分なからで、即ち神經活力が强盛なからである。

そこで、此通り、以て生れて好きな遊戯であつて見れば、この時代の遊び盛りの子供に遊戯をさせないといふのは、甚だ酷な話であつて、言はゞ子供に與へられた自然の賜物を奪つて仕舞ふものといつてよい。專問的にいつて見ると、子供の取扱上、自然に反した仕方といはねばならぬ。のみならず、自然が、これ程までに嗜好に適したものを彼等に賜はつたにつきては、何れ子供に取つてどれ程かの大なる利益がなくてはならぬ。これは、少しく子供の教育に注意するものゝ、一般に認むる所であつて、先づ誰でも次の事は承認が出來ようと思ふ。

一番に早い話が先づ、遊戯といへば大抵は運動が伴ふのが多いから、此時代の子供の身體の發達には遊戯が一等である、駈けつくらをやるとか、鬼ごつこをするとか、或は木登り戰さ事毬投げなど悉く身體の各部を運動させる、然も、遊戯の時には、一切萬事を忘れて運動するのであつて、極

めて愉快に、少しの心配もなく自分の思ふ樣にやる、一體物事に苦與々々する程身體の害になる事のないと同じ樣に、心を愉快に持つ程身體の爲になる事がない、大抵の病氣などは、心配しないで面白く暮すと直つて仕舞ふものだ、子供でも非通りのことであるから、たゞ運動で身體の發達を助けるといふ他に、心を愉快にさせる處から、身體の爲になるといふ點も餘程大きなものである。だから御覽なさい、遊戯の嫌な子供といつたら大抵は顏色の惡い、不活潑な子供に限ります。之は主に身體の方の側からいつたのであるが、精神の側から見ることも頗る肝要だと思ふ。先ゴ、遊戯に由つて、自制とか共同とか同情とかいふ所謂社交的道德の涵養せられるといふことは著るしい點だと思ふ。子供が之等の社交的道德の種子を得るのは、實に同輩との遊戯に由るのであつて、子供に遊び仲間の必要といふのは、主に此點にある。一體子供は頗る我慾が强い、人の事などはどうでもよい、自分さへよければ夫で搆はぬといふ風なのである。所が、これが仲間全志の遊戯で以て大に矯正せられる、といふのは、友達と一所に遊ぶとなると、どうしても、そう〳〵自分のことばかり考へて居る譯には行かなくなる、夫では遊戯は丸で出來なくなる、そこで以て、一身の我儘を制して人と事を共にするといふ美風とか、又は自分を推して他を思ふといふ美德は自ら涵養せられる事になるのである。夫からも一つは制裁に服從する習慣を得させることで、一體遊戯となると、子供同志の間に、何等かの子供相當な規約が出來て居て、夫に由つて遊戯が出來て居る、夫を守らない

と、或は仲間から、退けられたり、或は、てんで遊戯といふものが成り立たなくなる。そこで、遊戯は自然に法律とか約束を守るといふ良習慣を得させる事になる。夫から、も一つ之は餘り人が注意しないが、然も、極めて大切な要素がある、即ち遊戯によつて、將來、意志の强固な人間が出來るといふことである、一體、自分で自分の意志の儘、自分の信ずる所を決行するといふのは、頗る貴ぶべきことなので、何事も人の言ふなり次第、人の意志の通りに行ふ人ば、いはゞ機械の樣のもので一向取るに足らぬ人といはねばならぬ。そこで、若し子供が始から、其一擧一動始終大人が干渉して、何から何まで大人の意志の通りに働かせるのであると、丸つきり子供が自分で以て自分の意志を働かせることが出來なくなつて、子供の動作が丸で機械の樣になる。夫では、成長の後も自分で自分の意志を實行するといふ氣力がなくなるう。所が、自然は子供に與へるに早くから、子供自身で意志を決行する機會を與へて居る、即ち遊戯の時は、子供は全く大人の意志から離れて、自分が自分の意志の實行者となつて居る。これがそも〳〵遊戯の大に價値のある處で、遊戯を敎育に利用する者の深く考へんければならぬ所である。

最後に一言するのは、遊戯に由つて、子供はいろ〳〵の社會上の知識を得るのである。西洋の學者は、遊戯は子供が將來の社會生活上のいろ〳〵の職業の下稽古だといつたが、全く其通りで、子供のして居る遊びを見ると、戰爭とか客事とか、人形遊びとか、土堀りとか、とかく大人の社會の

職業の眞似をして居る、之で以て獨り手に社會的職業の豫習をやつて居るといつてよい。數へ立てると數限りもないが、特別な遊戯になると、色で以て眼の練習になるのもあり、考を要する遊戯で以て、推理の力を發達させるとか、いろ〳〵あらうと思ふ。

だから、兎に角、子供に遊戯を禁ずるといふのは天與の快樂を彼等から奪ひ去るのみならず、仝時に、此時代の子供の教育上、主要の方便をも奪ひ去るものといつてよい。而しどの遊戯でも悉くといふ譯でない、中には隨分有害無益なのもあるから、それは、保育の任にあるものが氣を付けねばならぬ所である。

（此項未完）

◉女子高等師範學校附屬幼稚園分室（八號の續）

一、家庭に關する關係

幼兒が家庭よりも幼稚園を以て無上の樂土と考へて居る事、家庭の幼稚園及保姆に對する尊敬感謝の念の深き事、幼兒は家庭の境遇上中流以上の社會の幼兒の有せざる長處をも欠點をも有する事又彼等は家庭に於ては其父母より教育的に取扱はれる事少なく周圍の人も無教育の者多く、絶にず教育的に彼等に對するは保姆のみなる爲に主義の不統一などいふ事はなく其訓練は隨分思ふ通りに行く事等前年度と同じ、

又一方より考ふれば彼等幼兒の父母は概して無教育なるが爲に幼稚園にて一日暖めて家庭は十日之を冷すといふが如き憾は免がるゝを得ず、且つ幼